

〔シンポジウム〕

総 括
抗悪性腫瘍物質について田 崎 勇 三
癌 研 究 所

本日のシンポジウムを誠に興味ふかく拝聴した。各演者が皆それぞれ心血をそそがれた問題について、今日までの成績を発表していただいたことは化学療法学会としても大きな収穫であつたと信ずる。

山元教授は子宮頸癌 150 例を含む総数 195 例に達する子宮及び外陰部の癌や肉腫について、8-アザグアニンを使用して可成り良好な成績をあげている。

これらの症例は何れも手術か放射線かの根治療法をしており、治療前に、又は治療後に或は照射と同時に本剤を使用している。

そして 8-アザグアニン使用群と非使用群とに分けた手術の治療成績を見ると、1 年治癒率から 3 年治癒率まで何れも使用群の遠隔成績の方が 6.2%, 8.9%, 12.6% とより良好なのである。このことは照射例においても同様で 3.3%, 18.6%, 15.8% と使用群がより良好な成績をあげている。

また 3 期、4 期のものに本剤を使用して子宮の移動性が現われる場合があり、その時には照射療法をやめて手術を行うことが出来るという。これも本剤使用による 1 つの利点といえる。その他臨床的に自覚的又は他覚的に軽快したものについても述べられ、局所注射の効果もスライドで見せられた。

他の部位の悪性腫瘍に対するよりも、特に女性々器の悪性腫瘍に対して本剤は良好な成績を示すようである。

石山俊次博士は 193 例の種々の悪性腫瘍についてのザルコマイシンの臨床実験例中で特に自、他覚的に著明な症状の好転をみせた 9 例を著効例として述べた。そしてこれらを 3 群に分類し、

第 1 群の自、他覚症状が消失して、治療中止後 12 カ月ないし 26 カ月の現在まで再発の徴候がなく、臨床的には一応治癒したような健康状態をつづけているものが 4 例もある。即ち悪性絨毛上皮腫の肺転移、小円形細胞性リンパ肉腫、直腸癌再発例や細網肉腫などである。これらの中あるものをスライドで供覧された。多数例中にかかる良好な効果を示すものがあることは誠に興味がふかいのである。つまりザルコマイシンがある種の悪性腫瘍に対して、種々の程度の効果を与えることはもはや疑いないところであろう。

島田信勝教授はカルチノフィリンを 131 例の種々の悪

性腫瘍患者に使用した成績を述べたが、自覚的效果としては食思好転 7 例、疼痛軽減 4 例などであり、他覚的效果としては腫瘤縮小 13 例、軟化 6 例その他全身状態好転や腹水減少など 31 例がある。当然悪化を予想された 4 例において増悪を抑制したものもあるという。また病理組織学的検索をした同じ症例で臨床効果を比較すると、効果のあつたものは肉腫に多かつた。即ち肉腫 13 例で癌腫は 6 例である。

またザルコマイシンの無効例にカルチノフィリンが有効であつたり、その逆であつたり、また双方とも無効のこともあり、抗悪性腫瘍物質に対する腫瘍自身の感受性が非常にまちまちであると述べている。兎も角もカルチノフィリンもある種の悪性腫瘍に対して、ある程度の影響力をもち、治療の効果をもつといえるであろう。

芝茂教授はアクチノマイシン 1048 A (ACM) に関する研究を発表し、基礎的研究において、ACM は撰択的に細網細胞系を侵襲するという結論に達した。さらに臨床的研究においては、組織学的に決定された細網肉腫 11 例、ホジキン氏病 5 例、計 15 例に ACM、アクチノマイシン J、及びサナマイシンを使用した、3 例を除き腺腫の縮小を見た。

また ACM で前処置後放射線治療を行つた場合に、非常に少い X 線の線量で驚くほど速かに腺腫が縮小し、相乗的作用を思わせる 7 例を経験したことは貴重な収穫である。即ち ACM と放射線との併用療法は細網肉腫の治療に興味ある問題を提供したといえる。

最後に白羽彌右衛門教授は主としてナイトロミン (NMO) の動脈内挿管投与について興味ある講演を行つた。ポリエチレン管を病巣所在の臓器組織を目標として、一定部位の動脈枝から挿入し、その動脈内端が、目標臓器の所屬動脈に一致するように固定した後、これから薬剤を繰り返し注入する方法を案出したのである。結論としては実験腫瘍で著明な抗腫瘍作用を示す NMO を人体内で、容易に且つ多量に腫瘍細胞に到達させる目的を達して、悪性腫瘍の約半数以上において、臨床的改善または病理組織学的改善を認めたが、まだ根治例はないという。しかし抗悪性腫瘍物質投与の 1 つ新しい方向を開拓したもので将来の成績を活目したい。

総括としては 8-アザグアニンも、ザルコマイシンも

カルチノフィリンも、ある種の悪性腫瘍に対して、種々の程度の影響を与え、ある程度の臨床的軽快をもたらすことが出来る。中には臨床上一応治癒したような印象を与えるもの数例の報告をきいた。しかし癌の再発は非常に長期間を要するものがあり、特に乳癌などでは 15, 6 年後に再発するものもあるから、前述のような症例は長い経過の観察が必要であろう。だが兎も角も良効な治療成績とはいえる。沉んやそれらの症例はみな転移例か、再発例で、可成り進行した悪性腫瘍例ばかりであるか

ら、この症例は高く評価されてよいと思う。

また今後の治療法のゆきかたとしては、手術や放射線療法の前後に用い、手術の適応を拡め、或は再発を予防し、或はこれらと併用する方法、或は数種の抗悪性腫瘍物質を併用する方法などがあるであろう。また動脈内挿管投与の方法は薬剤を比較的高濃度で目標に到達せしむることが出来るので、1 新方法として種々の抗悪性腫瘍物質について応用されることが期待される。